

口永良部島の火山活動解説資料（平成 25 年 10 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。しかし、新岳火口内では噴気活動が続いており、火山灰等の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに注意してください。

平成 24 年 1 月 20 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 10 月の活動概況

・地震や微動の発生状況（図 3-②③⑦⑧、図 4）

火山性地震はやや多い状態で経過し、月回数は 317 回（9 月：235 回）と、前月と比べてやや増加しました。震源は、新岳火口付近のごく浅い所に分布しました。

火山性微動の月回数は 6 回（9 月：10 回）と少ない状態で経過しました。火山性微動の継続時間の月合計は 7 分（9 月：13 分）でした。

・噴煙など表面現象の状況（図 1、図 3-①⑥）

新岳火口の噴煙活動に特段の変化はなく、白色の噴煙が火口縁上 50m 以下で経過しました。

・地殻変動の状況（図 3-④、図 5、図 6）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 25 年 11 月分）は平成 25 年 12 月 9 日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50m メッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 23 情使、第 467 号）。



図 1 口永良部島 噴煙の状況（10月3日、本村西遠望カメラによる）

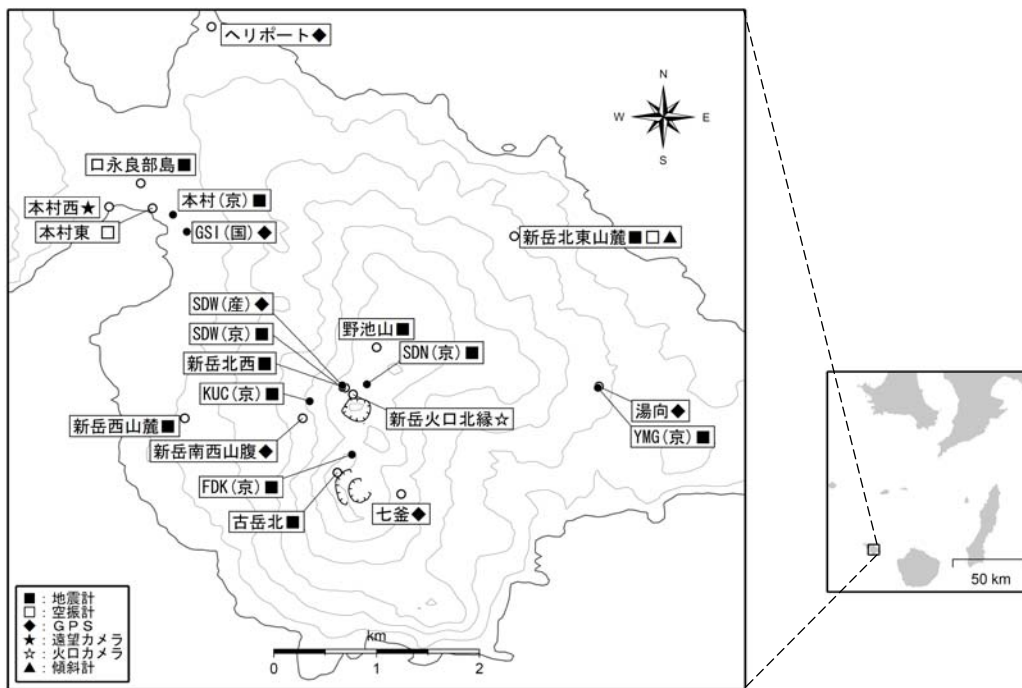


図 2 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(京)：京都大学、(産)：産業技術総合研究所

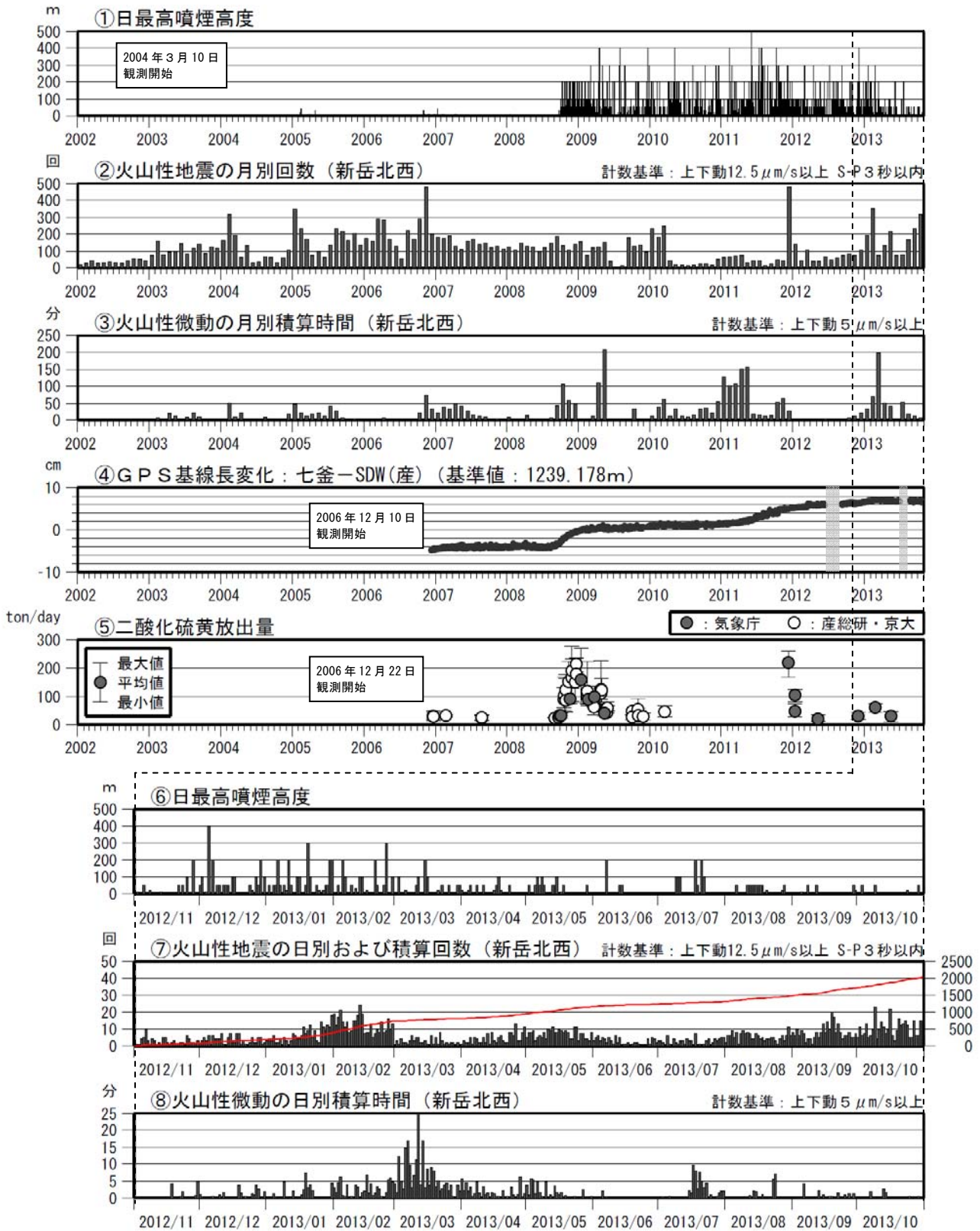


図3 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2013年10月）

<10月の状況>

- ・火山性地震はやや多い状態で経過し、月回数は317回（9月：235回）とやや増加しました。
- ・白色の噴煙が火口縁上50m以下で経過しました。
- ・火山性微動の月回数は6回（9月：10回）と、少ない状態で経過しました。継続時間の月合計は7分（9月：13分）でした。

図中④の基線は図5の①に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

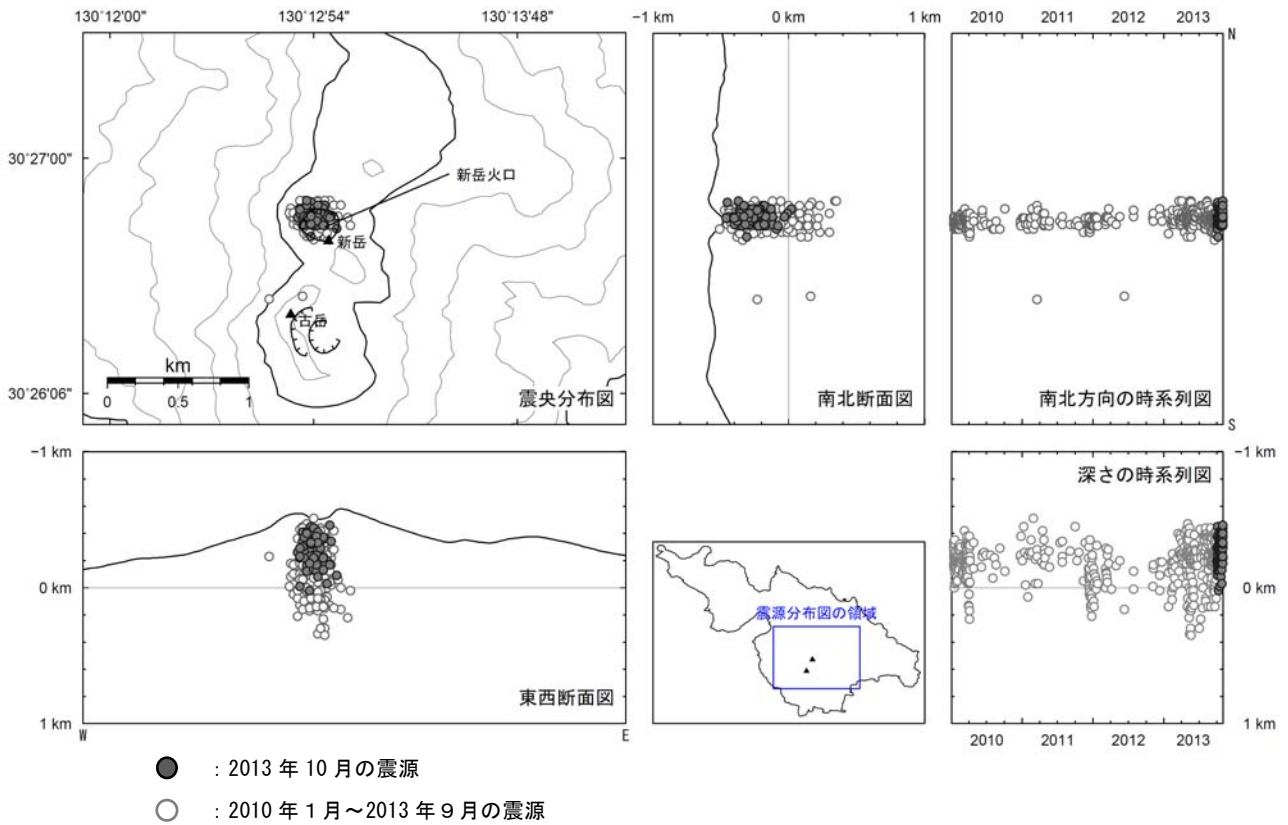


図 4 口永良部島 震源分布図（2010 年 1 月～2013 年 10 月）
 <10 月の状況>

震源は、新岳火口付近のごく浅い所に分布しました。

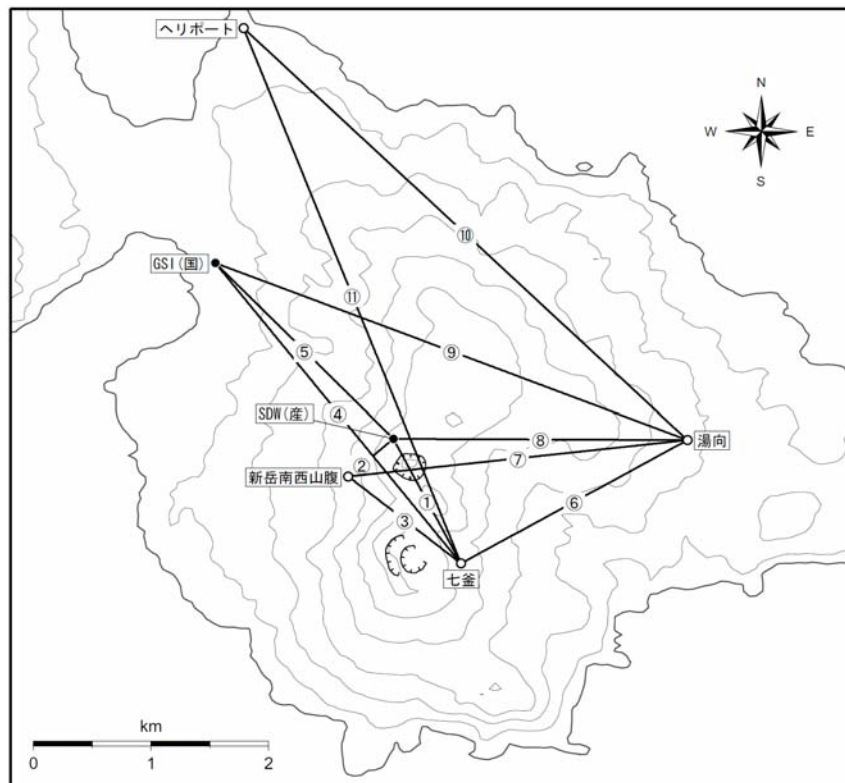


図 5 口永良部島 GPS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(産)：産業技術総合研究所

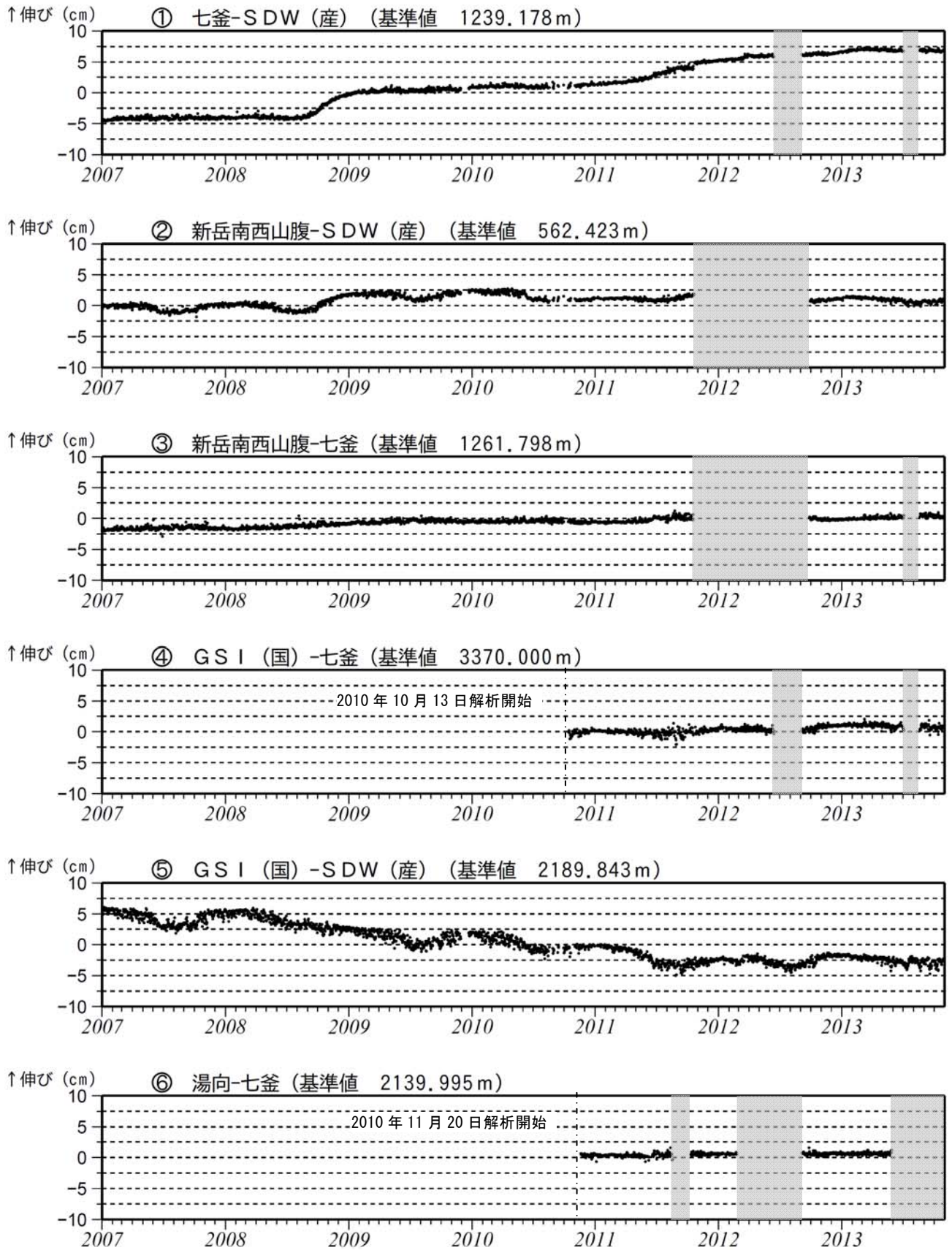


図 6-1 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2007 年 1 月～2013 年 10 月)
GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。
これらの基線は図 5 の①～⑥に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。

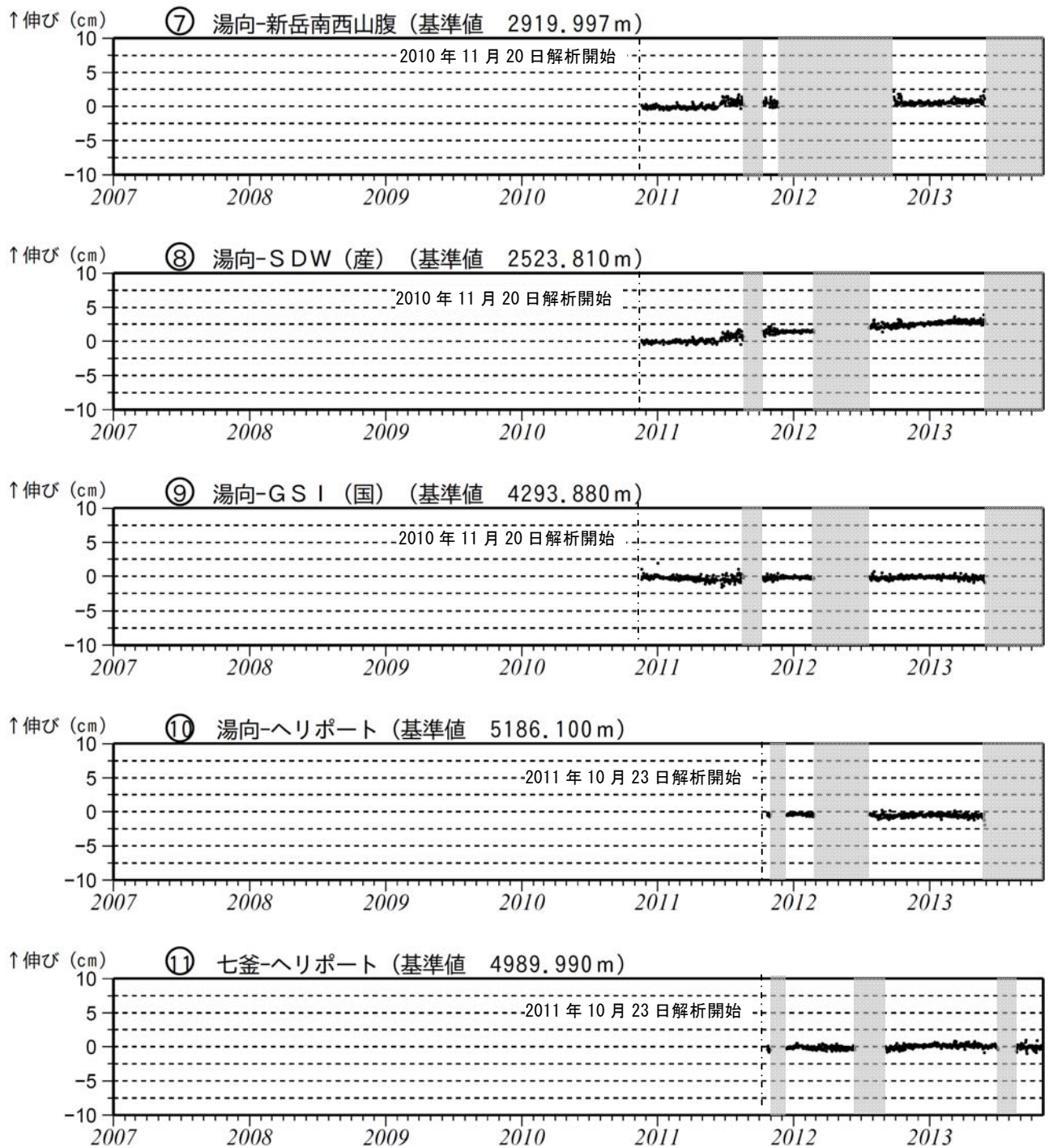


図 6-2 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化（2007 年 1 月～2013 年 10 月）
GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。
これらの基線は図 5 の⑦～⑪に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。